

温故知新

基底点に回帰する教育の指向

高橋 さやか

激動・動乱の一九九〇～一九九一年。そして一九九二年も早くも極月。この一年、何がどう治まったのか、更なる動乱がはじまっているのか。半世紀も

に回帰すべきであり、それを指向して歩むことがまともな前進・発展へのあり方だ、という覚悟になった。

子どもの教育専一にかかわりつづけた者にとって、釈然とする———することができ^{ことわ}る事理一つ見当たらぬまま、時が移り過ぎるのを否応なく思い知らされるのは、何とも身の置き場がない、口惜しくもおちこまざるを得ない心地である。

いずれあと幾年も生きないのであれば諦めて見切りをつけるのが年相応と言われそうだけれど、その如何にも年相応に、どうしても、見定めた身のおき

この国でも、草創期の幼稚園は、30名前後で一応の規模を成立させ、60名前後を一園の定員の目途としていた。三歳～六歳の三年保育で各年級12～24名（多少の出入り^でを許容して、一クラス20名平均で三クラス）の60名が幼稚園というもののあるべき様と考えられていた。今日でも、欧米の常識的かつまともな幼稚園は50～60名定員を越えないものようである。

どころが、「温故知新」———幼児の教育（早期児童———early-childhood———教育）は、その基底点

人間は、誕生して生命体として独立し、ほぼ一歳六か月で人類の特徴を確保確立し、三歳で自我を確

立し、六歳で基本的な人格（人間——社会人としての規格）社会生活者として独立し共同し得る基本的可能性）を獲得する……ならば、保育幼児教育の目標の基底には他に目の外らしうもなく、「基本的な人格の達成」があり、教育集団の形態に見る基底には小規模（少数定員制）園が断乎存在する。

心理学の力学説というところも、集団成員間に機能する心理的交流の力関係は、30名以内において相互にはほぼ同等に及び合う、とされていて、それ以上の集合体では、次第にひびき合う人間関係は拡散し、稀薄になり、おとんでも、まして子どもは、個に還元あるいは内閉してしまふ。「わたし」と「わたしたち」が一致し共同できる「集団」の構成人員は30名を一単位（の限度）として見ることができるのである。小グループとしては6名がよくまとまりかつ活度度が高い規模といえるようであり、クラス集団として、12〜24名（6×2〜6×4）、教育

集団としての一園が50〜60名、というさきにあげた数字は、いい加減ではない、理論的に意味のある数字である。

理論的といえ、保育教育理論でも、故きを温（たず）ねることにいま一度熱意を傾注しなければならぬと切に思う。

ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、デューイ、倉橋惣三、クループスカヤ、……もう古い、というのは、ただ名前と生年について知っているだけで、これら先人の所説立論をどれほど知って……理解した上で、なのか。よく学んでもいないのに、古い、時代は激しく猛烈な速さで変わってしまったのだ、とばかり顧みず、心も虚にただ先を急いでいるつもりでも、それでは荒廃したこの世紀末世代から、もう一度「人間」の生活と、「生活者人間」の教育の、本当の新しい出発・再建を期することはできないと考える。

（西南女学院）